



立入が丘小学校だより



小学校～それは小さな社会～ MAKING OF A JAPANESE

先月、上記タイトルの映画を見てきました。私にとって何年かぶりの映画鑑賞です。東京の世田谷区のある公立小学校を映し出したドキュメンタリー映画です。年間200日ほどある授業日数の内、150日間、4000時間に密着し、700時間撮影した映像を編集した、生の声や姿だけで構成されたドキュメンタリー映画です。1年生と6年生の生活を追いかけた作品で、先生へのインタビューなどは多少入りますがナレーションもテロップも一切入りません。普段、私が勤務する学校で目にしてきた日常が時間の経過を追って流れていきます。まだ現役の私ですが、担任時代や自分が小学生の時のことを思い出して、懐かしくなりました。そこには1年生には1年生なりの、6年生には6年生なりのノンフィクションドラマがあり、胸が熱くなりました。うまくできなくてベそをかく1年生に、優しく「大丈夫だよ」と慰めて手伝うクラスの仲間の姿や、運動会の集団演技で披露する縄跳びがうまく跳べず、帰宅後にも練習を続け、運動会本番で成功して笑顔を見せる6年生の姿等、涙があふれてくる場面がたくさんありました。

この映画を撮影した山田エマ監督は、英国人の父と日本人の母の間に生まれ、大阪の公立小学校を卒業後、インターナショナルスクールへ進み、米国の大学に進学しました。“自分の強み”は日本の公立小学校で培われたと感じ、世界でほとんど知られていない日本の小学校の教育制度を世界中に紹介したいという意図をもってこの映画を作られたそうです。「日本の小学校の教育制度が、“他人のことを自分のことのように思える”ことをベースに作られている。学校があり、その中にクラスがあり、その中に班がある。悪くすると“連帯責任”へ繋がってしまうこともあります。そこに思いやりや助け合い、周りのことを自分のことのように思うことを学ぶ。それが、日本の小学校の素晴らしいところです。」とマスコミ取材のインタビューで述べられていました。

言われてみれば大地震などの災害時に、救援物資などの支給に整然と列を作り受け取る姿が海外メディアから賞賛されることがありますが、この秩序ある行動、助け合いの精神は、小学校時代から培われてきたものなのかなとも感じます。

日本の公立小学校では当たり前の給食の配膳や掃除を児童がすることは、外国では例が少なく、「特別活動」は注目を集めているそうです。教育改革や働き方改革がどうあるべきか。変えるべき部分、大切にすべき部分など、この映画を通して、海外からの目線も入れながら考える材料にしていきたいと思います。

溝掃除（土あげ、落ち葉集め）、ありがとうございました。

守山市商工会議所建設部会では地域貢献活動として、市内小学校を巡り、集中豪雨時の災害防止を目的に、運動場脇の溝にたまった土砂や落ち葉の撤去作業をされています。今年度は、本校も作業をしていただきました。1月23日9時より30名を超える建設部会所属企業の方々が集まってくださり、1時間ほどかけて溝をきれいにしてくださいました。溝周辺の落ち葉もかき集めてくださり、すっきりときれいになりました。ありがとうございました。